

2018年2月25日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記7章40～51節

説教：供えのパンとなる神

はじめに

父ダビデの跡を継いでイスラエルの三代目の王の座に着いたソロモンは、神の知恵をいただきながら七年という月日をかけて神殿を建設していきました。神殿は神を礼拝する場所であるとともに、動物がほふられ、焼かれて煙にされる場所でもありました。当然、礼拝に用いるための備品や、動物をほふるためにさまざまな道具が必要となります。そこでわざわざ外国からヒラムという職人を招いて、これらのものを作らせます。今日の箇所最初の所には、彼が作ったものが挙げられています。これまで見てきたことから繰り返しますが、40節に書かれていることだけは説明しておきます。「ヒラムは灰つぼと十能と鉢を作った。」これは何に使うか。動物をほふるときに血が流されます。その血を受けるのが鉢です。その血はどうか。祭壇や神殿で使われている器具に注ぎかけられました。ほふられた動物は焼かれ、灰となります。十能で灰を集め、灰つぼに納めて運び出される。そのような使われ方がされました。

この後48節から、主の宮の用具の話に移ります。「ついで、ソロモンは主の宮にあるすべての用具を作った。すなわち、金の祭壇と供えのパンを載せる金の机。」きょうは、ここの「パン」に目を留めていきます。

1 神殿の意味

1) 必要なのか、いらぬのか

いつもそうですが、ここを読んでこれが信

仰とどんな関係があるのか、まったくわからない。多くの方はそう思われるでしょう。しかし聖書にこれだけ多くのページを割いて記しているのですから何か大切が意味があるはずで。

そもそも、ソロモンはどうして神殿を作ろうとしたのか。原点に立ち戻り、もう一度そこから確認したいと思います。私たちは、ただ信仰によって救われるとの約束をただ信仰によって救われるとの約束をただ信仰によって救われるのか、建物として立派な教会を建てなければ救われないというようなことは考えません。宗教改革を行ったルターは「ただ聖書のみ」と言って、ローマ法王とか、組織であるとか、行いだとか、教会の建物にまつわる装飾、そのようなものには権威がないと宣言しました。私たちはルターを源とするプロテスタントに属しますので、見ておわかりのとおり教会の中はじつに簡素で十字架しか置きません。どこかの組織に属してもいない。ところがソロモンはどうでしょう。実に長い年月をかけ、金や当時貴重であった杉材をふんだんに使って立派な神殿を建てました。それなのに今私たちは神殿は必要ないとの立場を取ります。どちらかが間違っているのか。そんなはずはありません。そうするとこの違いをどう考えたらよいか。

2) 天にあるものの写しと影（ヘブル書8章5節）

そのことをよく説明しているみことばがあります。ヘブル書8章5節です。「その人

たち（律法に従ってささげ物をする人たちは、天にあるもの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」

途中からの引用なので、すこしわかりにくいかも知れませんが、要点はこうです。神はモーセに天幕を作るように指示し、ソロモンには神殿を作るように言われました。その天幕も神殿も、天にあるもの写しと影である。言ってみれば立体模型のようなものということでしょうか。このみことばに従えば、ソロモンが作った神殿、そしてそこに備えられたさまざまな機材や道具。これらすべては天の写しと影ということになる。地上にいる私たちの目に立体的に見えるようにと、これだけのページを割いて説明してきた。そういうことになります。

2 供えのパン

1) 目的は？

そうしますと、今日目を留めようとしている供えのパンも天の写しと影ということになります。いったいなんのことでしょうか。お寺に行くと、祭壇の両脇には果物とかお菓子などが供えられているのを見ます。家に飾られている仏壇にもお菓子や食べ物が備えられていました。子どもの時にそのことを親に尋ねました。親は、「亡くなった先祖様に食べていただくために供えるのだ」と説明してくれました。死んだ者がどうやって食べるのかとそのときは不思議に思いました。神殿に供えられたパンもこれと同じで、神さまがいただくためにということか。全能の神もお

腹が空くのか。なんだか釈然としません。

2) 供えのパンをダビデに与える祭司アヒメレク

このことを考えるとき、第一サムエル記 21 章に出て来る事件が大きな手がかりを与えてくれます。事件のあらましはこうです。ダビデがまだ若く、イスラエルの初代の王であったサウルに仕えていた頃のことです。その頃ダビデは敵と戦えば全戦全勝、おまけにハンサムでしたから、女性たちが流行歌を歌うくらいのスターになっていました。おもしろくないのはサウルです。彼はダビデをねたむようになり、今で言うパワハラを繰り返したあげく、殺そうとまでします。たまりかねたダビデは数人の部下とともに逃げ出すのですが、急なことだったので何の準備もない。お腹がすいてきた。いつもであれば、通りすがりの家によってパンを分けてくださいとお願いすれば、みんな大喜びでパンを分けてくれました。しかし今はサウルから追われる身です。もしどこかの家に寄れば、すぐに密告される危険がある。仮に味方となってパンを分けてくれたとしても、ダビデをかくまったということで、見つければ相手は死罪となります。そこでダビデが思いついたのは祭司アヒメレクの家でした。万が一このことがサウルに知れてもアヒメレクに迷惑がかからないようにと、ダビデは慎重に配慮しながら何か食べ物が無いかと尋ねます。祭司アヒメレクは「普通のパンは手もとにはないけれど、聖別されたパンならばあります」と応え、主の前から取り下げられた供えのパンをダビデに与えました。

3) そのことでアヒメレクは殺される

こうしてダビデとその連れの者たちは、なんとか逃げ延びることができました。さてアヒメレクはどうなったか。ダビデがアヒメレクの家に入っていったのをある人物がこっそりと見ていて、やがてサウルに知らされる。その結果、アヒメレクとその一族は全員虐殺されてしまいます。アヒメレクは、神の前に間違っただけをしたわけではない。むしろ正しいことをしたのに、ひどい殺され方をしてしまいます。ダビデはこのことを後から知らされました。ダビデは生涯、この事件のことを忘れる日はなかったと思います。

3 供えのパンとなる神

1) 人の子は安息日にパンを与える (マルコ 2章 28節)

神はこのことをどう考えておられたのか。実はイエス自身が、マルコの福音書 2 章 23 節以降でこのことを取り上げております。ある安息日に弟子たちが麦畑を通りながら穂を積んで食べていたのをパリサイ人たちが見つけ、こんな非難をします。「なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」他人の麦畑から盗んだということではなくて、安息日に麦を積むという労働をした、それは安息日違反であるとの理屈です。

そんなパリサイ人に対してイエスはこう言われました。「ダビデとその連れの者たちが、食物がなくてひもじかったとき、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。アビヤタルが大祭司のころ、ダビデは神の家に入って、祭司以外の者が食べてはならない供えのパンを、自分も食べ、またともにいた者たちにも与えたではありませんか。」(マルコ 2 章 25, 26 節)

パリサイ人たちは、人がお腹が空いていよ

うがそのようなことには関心がありません。ただ安息日にしてはならないと言われていた穂を積むという労働行為を見て、お前たちは神の前に罪を犯しているのだと責め立てました。しかしイエスは、ダビデと祭司アヒメレクのところを思い出すように促します。祭司以外の者が食べてはならないと定められていた供えのパンを、ダビデも連れの者たちも食べたのを、あなたがたも知っているでしょう。これがもし律法に違反なら、ダビデは罰を受けたはずだがそんなことは聖書に出て来ない。ということは、安息日規定よりもお腹が空いていることのほうが優先されるのだ。これが聖書の言っている事です。実に当たり前のことで、これを聞いて私たちは安心します。

それで終わるのかと思ったら、このあとイエスは「人の子は安息日にも主です」と語っています。実に不思議なことばです。また後で考えたいと思います。

2) イエス・キリストとパン

これに関連して、ヨハネの福音書 6 章 51 節でイエスがこう語っていることを思い起こします。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

パンと言えば私たちが口にしているいつものパンを思い浮かべてきました。けれども最初にも触れたように、神殿にあるものすべては天にあるものの写しと影です。写しと影であるというのならば、本体があります。では本体は何か。ここで明らかになります。パンは、イエス・キリストご自身を指している。

普通のパンは食べてもいつかは死にますが、天から下って来た生けるパンは、それを食べた者は死ぬことはない。永遠に生きる。そんなパンである。

さて、最初に一つの疑問について述べました。今の時代、神殿は必要なのか、それともいらぬのか。その答えはこうなります。天から本体である救い主が来られました。本体である方が直接来られたわけですから、もはや天の写しや影はいらなくなる。その結果、神殿もなければ様々な道具もいらなくなる。それで私たちは簡素なところで礼拝をささげているわけです。

3) ベツレヘム(パンの家)でお生まれになった主

イエスは、ダビデと祭司アヒメレクのことを通して、神が私たちのパンのことを最も心配していることを教えてくださいました。でもひとつだけ納得できないことが残っています。ダビデは供えのパンを食べて生き延びたけれど、アヒメレクは殺されたではないか。そのことをダビデは自分の十字架として生涯背負うことになったではないか。そのことを神はどう考えておられるのか。

永遠に生きることのできるパンを、主はどのようにして分け与えてくださったのでしょうか、そのことを思い起こしてください。アヒメレクは自分のいのちを捨てて、供えのパンを差し出しました。これは天にあるものの写しと影でした。主イエスはご自分のいのちを差し出します。「人の子は安息日にも主です。」いのちを救うために自らパンとなって来られた。天から本体である神その方が来られ、いのちを捨てられました。

ソロモンが神殿を建てたとき、そこに供え

のパンを載せる金の机を作りました。仏壇に置かれるお菓子や果物は、先祖が食べるために供えられます。しかし祭壇にささげられた供えのパンは、そうではない。私たちが永遠に生きるようにと、私たちのために供えられたものでした。

主はクリスマスの夜、ベツレヘムでお生まれになりました。訳せば、「パンの家」あるいは「パンの神殿」という意味です。不思議なことです。私たち罪ある者をもこのように扱ってくださる神のあわれみに感謝します。